

アジアのことばと文字（レファレンスコーナー）

著者	佐々木 茂子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	181
ページ	56-56
発行年	2010-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004411

アジアのこぼれと文字

佐々木茂子

現在、世界には約六〇〇〇の言語が存在するが、言語学者M・クラウス教授の予測によれば、そのおよそ九割が今世紀中に消滅するかその危機に瀕している。一九九二年、ケベックで開かれた国際言語学者会議では、「危機言語」が主要なテーマに取り上げられた。宮岡伯人編「消滅の危機に瀕した世界の言語 ことばと文化の多様性を守るために」(明石書店 二〇〇二年)は危機言語の現状を検証し、保護について模索する。

世界の主なことばと文字については、下宮忠雄編著「世界の言語と国のハンドブック」(大学書林 二〇〇〇年)が、一〇二二の言語と世界の言語状況を、また、世界の文字研究会編「世界の文字の図典 普及版」(吉川弘文館 二〇〇九年)は諸文字の成立から現状までを解説する。

アジア地域は、『文字の宝庫』と言われるが、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編「図説アジア文字入門」(河出書房新社 二

〇〇五年)は、豊富な写真と平易な解説で、文字の魅力を伝えてくれる。さらに、石井米雄編「世界のことば・辞書の辞典 アジア編」(三省堂 二〇〇八年)は、アイヌ語からサンスクリット語まで三〇種類のこぼれについて、辞書編纂の歴史と主要な辞書類を解説し、ことばを学習する人はもちろん、そうでない人にとっても興味深い内容となっている。また、アジアの言語事情を概観するものとして、砂岡和子・池田雅之編著「アジア世界のことばと文化」(成文堂 二〇〇六年)と、小野沢純編著「ASEANの言語と文化」(高文堂出版社 一九九七年)が参考になる。前者は地域研究のあり方を言語と文化の視点から問い直そうとするもので、『等身大のアジアの人々の言語と生活文化』も紹介している。後者は、多言語社会である東南アジア七カ国の、複雑な言語事情を取り上げ解説するものである。

アジア地域で使用される主な文字には、漢字、インド系

文字、アラビア文字があげられる。われわれになじみ深い漢字は、その長い歴史の中で簡略化の道をたどって来たが、習得するには難しく、時間がかかるため、長らく一部の人間だけのものであった。本家中国においては、中華人民共和国成立後、識字政策として文字改革が実施された。藤井(宮西)久美子「近現代中国における言語政策」(三元社 二〇〇三年)は、主に清朝末期から現代までを対象とし、言語に関する各種法令に着目しながら、国民党と共産党による主張を検討する。漢字が一般の人々のものになる以前、湖南省江永県一帯に、女性たちが作り出した文字が存在する。遠藤織枝「中国の女文字 伝承する女性たち」(三一書房 一九九六年)は、女文字発見の経緯と女性たちが自らの思いを綴った歌を収め、遠藤織枝・黄雪貞編「消えゆく文字 中国女文字の世界」(三元社 二〇〇九年)は、女文字とハンゲル、カナ文字を比較した遠藤論文ほか、女文字に関する論文を収める。

漢字と並び、アジアに広く

伝播しているインド系文字について取り上げるのは、町田和彦編著「華麗なるインド系文字」(白水社二〇〇一年)である。紀元前三世紀に出現したブラーフミー文字を起源として、インド系文字の仲間として、インド系文字の仲間として、驚くべき多様性と拡がりを見せ、主に南アジアと東南アジアで使用されている。また、ハンゲルやカナ文字創出の際に影響を及ぼしたとも言われる。その発祥の地インドでは、ことばがしばしば政治問題の中心となる。植民地からの独立後、連邦公用語としてヒンディー語が選ばれたが、それは他の州にとつての多数言語ではなく、州ごとにそれぞれ独自の公用語が制定された。鈴木義里「あふれる言語 あふれる文字 インドの言語政策」(右文書院 二〇〇一年)は、このような二種類の公用語の相互の関係を検討し、国家や政治・行政といった枠組みが言語とどのような関係にあるのかを解明する。

一方、狭い国土に多民族が暮らすシンガポールにおいても、ことばは重要な政治課題であり、国家は様々な言語政策を講じて民族の統合を図ってきた。大原始子「改訂版シンガポールの言葉と社会

多言語社会における言語政策」(三元社 二〇〇二年)は、シンガポールで使用されていることばを、社会との関わりの中で捉え分析する。

『ラーオ語』は、植民地支配により、メコン川を境に言語上の境界線が引かれたことばである。矢野順子「国民語が『つくられる』とき ラオスの言語ナショナリズムとタイ語」(風響社 二〇〇八年)は、フランス植民地時代から一九七五年の社会主義革命までを対象として、ラーオ語がラーオスの国民語としてつくられてきた過程を、タイ語との関係に注目しつつ考察したものである。ラーオ語の『独立』は、ラーオスの国家としての独立維持に不可欠なものであったが、いまやタイ語の影響は、映画やラジオなど様々なメディアに乗ってメコン川を越えている。

アジアのことばと文字に関する資料は、この他にも多数刊行されている。ことばは様々な運命をたどり、文字は時に姿を変えてきたが、それらはアジアを知るための手掛かりになるだろう。

(ささき しげこ/アジア経済研究所図書館)